

蟹

牧師 山本 護

ふと見ると、伝道所の敷石脇に蟹がいるではないか。つついてみると、鋏をあげて巨人ゴリアト(サムエル上 17:4~7)にも立ち向かって来ます。田圃の水路はコンクリートで沢蟹は棲めません。生息できそうな沢があるとすれば大坪集落の向こう側の谷筋でしょうか。あの谷まではゴリアトの足で 20 分くらいですから、蟹の足だといったい幾日かかるのか。雨続きで天候に恵まれていたとはいえ、アスファルトの道路を横切り、鳥の眼も逃れて、よくまあここまで命懸けの旅をして来たな、と思えば胸が熱くなりました。

金子兜太に「狂気の沙汰霧の厠に沢蟹が」という臭い立つ句がありますが、沢蟹は時折狂気じみた冒険をするのかもしれませんが。ただこの蟹は何かを携えている。兜太にはこんな蟹の句もあります。「原爆許すまじ蟹かつかつと瓦礫あゆむ」。ゴリアトにも怯まない蟹よ、来る日も来る日も歩き続けて、八月の平和メッセージを届けてくれたのか。

「わが民は平和の住みか、安らかな宿、憂いなき休息の場所に住まう。しかし、森には雹が降る。町は大いに辱められる。すべての水のほとりに種を蒔き、牛やろばを自由に放つあなたたちは、なんと幸いなことか(イザヤ 32:18~20)」。

神の御手の内にある平和こそ憂いなき休息の場であり、家畜も柵で囲われることなく、野に放たれて心ゆくまで草を食む。そして平和であってこそ、どこでも、何においても、すべての可能性のために種を蒔くことができる。それでは、雹が降る森や辱められる町とは何のことでしょうか。目先の金や力や享樂によって平和を踏みにじる罪。それが平和と幸いの間にあって両者を脅かす(32:18~19)。

コロナ感染を用心して、この八月は構想していた平和集会を中止しました。その代わりに静かな平和行動として、集会所の壁にピースツリーを作りました。たくさんの人にメッセージを書いてもらい、それを葉として張りつけています。この蟹もそのために、ここまで長い旅をして来ました。「原爆許すまじ蟹かつかつと瓦礫あゆむ」を携えて。

神の御手の内にあることを感じていれば、私たちはゴリアトにも怯まず、長い旅も臭い厠も厭うことはありません。その時、そこが、そのまま安らかな宿、憂いなき休息の場所、種を蒔く沃野になっているのですから。Ω

